ランドセル

西本　美彦

昭和二十二年の春、私の小学校入学が近づいていた。戦後のことでもあり、準備らしいこともなかった。まともな服もなければ、帽子もない、靴も靴下もない。家が貧しいことはよく分かっていたので、あれが欲しい、これが欲しいと言うこともなかった。

元手のない者は漁業で喰っていくしかなかった。父もシラス漁の雇われ漁師であった。シラスなら、年中漁ができるのだ。二艘の網船にそれぞれ数人の漕ぎ手が乗り込み、仕掛けた網をたぐり寄せてシラスを獲る。船にはエンジンもモーターも付いてない。作業はすべて漁師の腕力まかせである。シラスが獲れると、大人二人でやっと運べるほどの大きな竹かごに入れる。竹かご一杯分ほど獲れると漁師たちの顔はほころぶ。　その日の口銭は保証されるからだ。竹かごに三、四杯も獲れれば大漁である。若くて元気の良い漁師が獲れたばかりのシラスを小舟で魚市場に運ぶ。シラスは足が速い。舟の櫓杭がギーギーきしむ音も激しさを増す。

芋飯と味噌だけの昼飯を済ますと、親戚の子供たち四、五人と連れだって、堤防沿いに魚市場へと歩いて行く。どの子も竹編みの小さいざるを帽子代わりにかぶっている。このざるこそが子供たちの大事な商売道具である。

シラスを積んだ舟が船着き場に近づくと、子供たちは足早に舟に群がる。まず、水揚げされた竹かごのなかをちらっと覗く。　お裾分けしてもらえるだけの漁であるかを見定めるのだ。漁が少ない時は、子供たちもわきまえていて、ねだることはしない。

勝負は、船着き場から魚市場までのわずか三十メートルの間である。大漁の時は漁師も気前がよい。子供たちはどこの網元の舟であってもまるで気にしない。合間

を見計らって、「おんちゃん、ちっと分けてや」と言って漁師の手前にひょいとざるを差し出す。　漁師は反射的にシラスをざるに掬う。どこの家の子であるか、確かめもしない。どこかの親戚の子であろうと勝手に思っている。　子供と漁師の一瞬の駆け引きである。このこつを身につけているのは漁師の子供だけである。とくに自分の父がシラスを運んできた時は、漁が少なくても、ざる一杯盛ってくれる。

集まってくるのは子供たちだけではない。シラスを茹でる釜小屋の周りを一日中うろついている野良猫たちも心得ている。魚市場の気配を読み取り、当たり前のような顔をしてぞろぞろと這い出してくる。猫たちは、竹かごの編み目からこぼれ落ちた生のシラスにあずかる　泥棒をしているわけではないから、だれも追い散らしたりはしない。

シラスをもらうと、子供たちはあっという間に町のなかに散っていく。門構えの立派な家を二、三軒も回れば新鮮なシラスはすぐ売れる。ざるに半分もあれば二、三十円、ざるに一杯もあれば五十円にはなる。稼いだ金は家に帰って母に渡す。母はその金をいつもの引き出しにしまう。

三月が終わりに近づき、桜がぽつぽつと咲き始めた。まわりの親戚も「気持ちばかり」と言いながら入学祝いを持ってきてくれた。縫い物上手のユキおばさんは、タンスにしまっていた父の軍服を裁断し、子供用の半ズボンを縫ってくれた。一番年上のヨシおばさんはわら半紙の帳面を二冊、父と同じ船に乗っているトシおじさんはアルミ製の筆箱とＨＢの三菱鉛筆を三本買ってくれた。母は古いセーターをほどいて、数日かけて白と青の縞模様のセーターを編んでくれた。私はそれだけでもわくわくするほど嬉しかった。

四月に入り気温が上がると、小学校につづく堀川沿いの桜並木はすぐにも満開になろうとしていた。遊びから帰ると、父が「ちょっと、来い」と言って、私を仏壇のある部屋に呼び入れた。古新聞で何重にもくるんだ包みを渡された。一枚一枚めくっていくと、最後に長方形の大きな紙の箱がでてきた。「開けてもええ?」と言い終わらないうちに私の手はふたを取っていた。

『ランドセル』だ。私の入学を祝う豪華なランドセルであった。贅沢にも黒光りしていて、背負ってみると接着剤の臭いがプーンと鼻を突いた。　私がシラスで稼いだ金を母が使わずに貯めておいてくれた。それに父が金を足して、闇市で手に入れたという。私の喜びぶりを見て、誇らしげに笑っていた。

ランドセルのなかには二冊の帳面もアルミの筆箱も鉛筆も入れてあった。消しゴム代わりにする黒いタイヤの四角い切れ端までちゃんと揃えてあった。ランドセルを背負って歩くと、筆箱のなかの鉛筆がカタカタと小気味よいリズムで鳴った。

母は「ちゃんと、お礼をせんといかんぜよ」と言って、仏壇を指さした。仏壇に手を合わせて、「おおきに、おおきに。ナンマイダ、ナンマイダ」と言う声は嬉しさのあまりうわずっていた。

長男の入学式ということで、母は嫁入りの時に持ってきたという一番上等の着物を着ていた。私は朝早くから自慢のランドセルを背負って、家中を走り回っていた。

小学校は小高い城山のふもとにある。校門をくぐると、真正面に古びた講堂が建っている。その前の築山には二宮尊徳の小さい銅像が遠慮気味にポツンと立っている。隣には、まだ幹周りの細い桜の木が一本だけ植わっていて、ありったけの花を咲かせて二宮尊徳の銅像を惜しげもなく飾っていた。

講堂は古くて危険だということで、入学式は行われなかった。生徒たちは直接自分の教室に入り、担当の先生の話を聴くことになった。はしゃぐ子も、暴れる子もいなかった。みんな不安げな顔をして、下を向いて黙って座っていた。見回すとランドセルを持っている子はほとんどいなかった。軍隊下がりの堅い革カバンを提げている子もいた。風呂敷一枚しか持って来てない子も多くいた。　買ってもらえた教科書は国語と算数だけである。。教科書二冊と帳面二冊、それに筆箱だけを入れるには、私のランドセルはあまりにも立派すぎた。

梅雨も終りに近づいたある日のことである。校門を出た時から雨足が強くなり、叩きつけるように降り始めた。ものの十分も走れば家に帰れる。私は迷わず、わら草履を脇に挟んで、ずぶぬれになりながら全速力で家に向かった。自分の家にあと

数歩で飛び込もうとしたちょうどその時であった。

背中が突然スーッと軽くなった。同時にランドセルの肩掛けがするりと抜け落ちた。一体なにが起こったか分からなかった。そっと自分の後ろを振り返ってみた。地面の泥にまみれてランドセルが無残な姿で崩れ落ちていた。たっぷり吸い込んだ雨水でふやけて、ぐしゃぐしゃに歪み、布地が剥がれてまとわりついていた。

まるで可愛い仔犬でも抱き上げるように、ランドセルを両手で優しく拾い上げようとした。すると底がバサッと抜けて、教科書と帳面と筆箱だけが地面に滑り落ちた。驚いて手を離すと、自慢のランドセルは茶色の厚紙と布の醜い塊となって地面に転がっていた。一瞬のうちに無残に変形したランドセルの亡骸を呆然と見つめるだけであった。

ちょうどその時父の声がした。「やっぱり、いかんかったか」 戸口に突ったったまま、父は目をそらし、ぼそっとつぶやいた。「厚紙に布を張ってあるだけじゃき」うしろで母が震えていた。

紙粘土のようになった塊は雨に叩かれて少しずつ溶けて流れて、今にも消えていきそうであった。降りしきる雨を恨みながら、両手でそっと掬い上げると、厚紙の塊に絡まりついた黒い布地がまるで死者の頭髪のように指の間からするりと垂れ落ちた。あたりの雨を蹴散らすかのように私は、「ウォーオ」という無念の叫び声を放った。すると堰を切ったように大粒の涙がぽろぽろと溢れだした。

西本　美彦

一九四一年　高知県生まれ
一九六一年―一九七一年
ベルリン・フンボルト大学文学部言語学科
インド・ヨーロッパ語比較言語学専攻
同大学　博士コース　(Dr. phil)
一九七一年―一九七八年
立命館大学
一九七八年―二〇〇四年
京都大学大学院
二〇〇四年―二〇一一年
関西外国語大学